

西の湖へ放流したワタカ種苗の成熟状況

根本 守仁

◆背景・目的

琵琶湖固有種であるワタカの種苗放流は、2002年度から毎年実施している。過年度に放流した種苗は既に親魚サイズとなって再捕されており、今後は放流魚が再生産することによる資源の増加も期待される。そこで、西の湖へ放流したワタカの成熟状況について調査した。

◆成果の内容・特徴

- ・調査は、2006および2007年の産卵期である6月中旬～7月に、西の湖や近隣の琵琶湖での漁獲物を対象に、ALC標識により放流魚であることが確認されたものについて分析した。
- ・成熟状況については、生殖腺重量を測定するとともに、外観から雌では成熟、未熟、および産卵直後の3段階、雄では成熟および未熟の2段階で成熟度を評価した。
- ・雌の年齢別の成熟度を調査したところ、満3年以上ではすべて成熟していた。満2年では、成熟度別の体長組成を図1に示したが、体長150mm未満のものすべてと体長150mm以上のものの6.17%が未熟であったものの、全体としては89.16%が成熟していた。
- ・雄の成熟状況についても同様に、満3年以上ではほとんどが成熟しており、満2年でも未熟なものは2.35%であり、ほとんどが成熟していた。
- ・2007年7月の琵琶湖および西の湖で雌のGSIの推移を図2に示した。琵琶湖では産卵前のものが多く、未熟なものを除いたGSIの平均は11.59%であった。一方、西の湖では平均5.34%であり、産卵後と思われる個体も含まれていた。

◆成果の活用・留意点

今回の調査結果から、放流魚が再生産していると考えられ、今後の資源動向に注目していく必要がある。

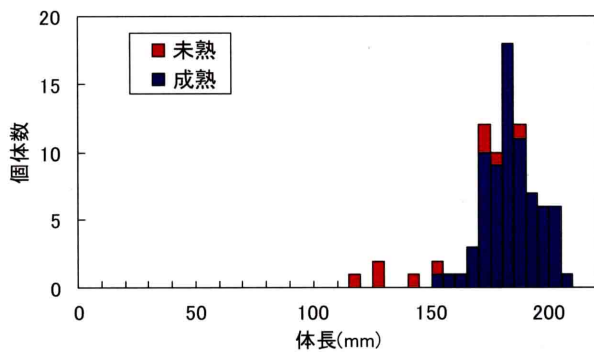


図1. 満2年のワタカ雌における成熟度別の体長組成

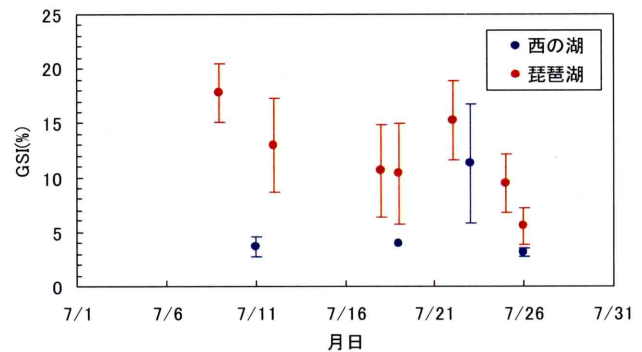


図2. 2007年7月における水域別のワタカ雌のGSIの推移

* 本報告は水産庁による平成19年度湖沼の漁場改善技術開発委託事業の成果の一部である。